

文化遺産の継承のために

吉田 いま読み書き、とくに漢字の話だったわけですが、教育問題としてはただ読み書きだけではなくて、もう少し精神的な面とか、理想とか、そういう問題がいろいろあると思うのですけれども、そういうものについて先生はどういうふうに考えていらっしゃいますか。

石井 かつて藤堂さんと読書新聞で論争したことがあるんです。それは漢字の問題なんです。漢字をどのような感度で学ぶかということたんですけれども、つまり藤堂さんは、「いろいろ学習する手段としての漢字というものを考えるか、それとも現在の段階におけるコミュニケーションを中心として考えるか、あるいは過去の文化遺産を受け継ぐ手段としてものを考えるか、そういうことによって漢字に対する考えも変わってくる」という議論をなすっていました。私は、これら二つのものは同じなんだ、これを別々のものとして考えるのはおかしい。これからのことを考えるには、まず一番目に過去のことをじゅうぶんに研究して、過去のことをそのまま受け継いで、いままでの教育というものをじゅうぶんに知ることが、次の段階の足がかりになるんだ。過去のことをじゅうぶんに知らないで、ただそこで現在あるものから、どういう方向にでもいい、進めていこうと考えると、これはほんとうの意味の進歩ということとはあり得ないと思う」と答えたわけです。

私はそういう意味で、できるだけ過去のものが短時間に吸収できる、その能力の中心はやはり漢字力だと思うのです。正しく漢

字というものを身につけて、深く漢字の持っている意味を身につけておれば、短時間で過去の文化遺産というものを吸収することができるわけです。そうした上で、それから自然と自分の批判的な考えというものが出てくると思います。

現在におけるわれわれ人間の行動というものは、できるだけ過去の文化遺産というものをじゅうぶんに消化しきったものほど、ほんとうにこれからの力強い日本の将来を作っていくんじゃないか、そういうように思います。

吉田 その考え方というのはわかるような気もするんですが、他面たとえば自然科学を学ぶというふうなことも、非常に必要ですね。自然科学を学ぶ場合に、漢字を使って学ぶのか、これはむしろヨーロッパででき上がってきた文化ですね。中国にないとは申しませんが、それを学ぶ場合に漢字を使っていることが、むしろかえって理解を妨げるんじゃないかという問題もあるわけです。その場合は現実に使っているんだからそれを知っておかなければならないという発想で先生はお考えになっているわけですか…。

石井 少なくとも初歩の段階においては、漢字、仮名まじり文という日本文になった書物、そういう手引書というものをまずじゅうぶんに読みこなせなかったならば、これはやはり進めないと思うのです。それは欧米の原典を直接に読むということ、それはもちろんのことですけれども、そこへ行く手前に日本文で書かれたもの、そういったものはおそらく私は一生必要じゃないかと思うのです。